

新発見、諸橋轍次の絶筆について

佐藤 互

初めに

諸橋轍次（一八八三—一九八二）は、代表的な号を止軒。大漢和辞典を編纂したことで国内外に業績が認められている。この諸橋轍次を記念して、諸橋轍次記念館が平成四年（一九九二）新潟県三条市庭月（旧下田村庭月）に建てられた。この諸橋轍次記念館（以下、記念館）には諸橋轍次（以下、諸橋）に関する資料が遺族と関係者の努力で記念館に集められ保存収蔵されている。本年（二〇一二）三月には同記念館展示室のリニューアルが終了し、四月にリニユーアルオープン式典が行われた。

筆者は、このリニユーアル事業に際して、三条市、諸橋轍次記念館、乃村工芸社との会議に参画した。このような状況下で、それまで以上に記念館収蔵庫に出入りする機会が増え、今回の新発見に繋がったのである。

一、これまでの絶筆について

ここで言うところの「絶筆」は、諸橋が百歳の人生で一番最後に書いたであろうと推測される「毛筆の書」を指す。

これまで絶筆と称されてきたものは、筑波大学及びその前身である東京教育大学、東京高等師範

学校の同窓会である茗溪會のために、扇面に書かれた「穆如清風」である。これには、「茗溪會百周年記念 辛酉佳月 白寿老人止軒」と為書きが書かれている。この辛酉佳月は、昭和五六年（一九八一）の八月である。また、白寿老人止軒は、九十九歳の老人止軒ということである。これを諸橋が書いたいきさつが「大漢和辭典修訂版月報4」（昭和五九年十月大修館書店）に諸橋の直弟子で、当時東京教育大学名誉教授であつた鎌田正の文章で載せられている。

絶筆としての「穆如清風」

恩師が「茗馨七十年歌」を茗溪会に寄贈したことは上述のとおりであるが、実はその茗溪会百周年の事業の一つとして、茗溪会は恩師の揮毫を熱望し、その交渉を私に依頼したのであつた。時は百周年記念祝賀会の前年の昭和五十六年の夏であつたと記憶している。私は早速その旨を恩師に伝えて御依頼したところ、その光栄には感謝しながらも、最早老齡その責を果たすことができないといつて固辞された。時に恩師は東京逋信病院から御退院直後のことでもあつたので、御無理にお願いできないと考え、その旨茗溪会に伝えた。しかるに茗溪会では是非ともとたつての熱望に、再び恩師にその意を伝えたところ、「茗溪には随分とお世話になった。百周年の記念祝賀会に百歳の自分が書くのは意義あるかも知れない」と言われて快諾されて揮毫されたのが、「穆如清風」という墨痕淋漓たる四字であつた。

恩師はこの解説としてみずから次のように記されている。

「穆として清風の如し」と読む。詩経の烝民の詩の中の一句である。作者尹吉甫は周の宣王に

事えた名臣だが、弱きものをしいたげず、強きものを恐れず、治績が多かった。しかるに其の功を私せず、宣王の徳は和穆清風の万物を感化するようだとたたえているのである。

穆は和なりとも、また深遠なりとも解しているが、要するに人柄にしても事業にしても、人目につかないが、自然に深く影響を他に及ぼすきまである。

詩は比興を尊ぶ。茗溪の先達百年の成績は此に似たものがあるように思うから茲に採録した。

また、扇子は風を生ずるためのものだ。

人材育成の遺功を挙げながらも、それを誇ることのなかった茗溪先達の業績をたたえられているが、その先達の第一人者こそは、まさしくわが諸橋先生というべきではあるまいか。

後でうかがったことであるが、先生はこの四字を典籍の中から選んで揮毫するのに精根を傾けられ、その御疲労のために一週間ほどお休みになったということである。「人の将に死せんとするや、其の言や善し」といわれるが、一世の師表と仰がれた碩学大儒の諸橋先生は、この四字とこの解説を絶筆として翌昭和五十七年十二月八日に他界されたのであった。

因みに、この扇面と諸橋の解説文は、修訂版月報4に写真が載せられているので参照されたい。さて、引用文から、扇面に書かれた「穆如清風」を直弟子等関係者が絶筆と断定してきたものであることは間違いない。

二、新発見の状況について
筆者が、記念館のリニューアル事業に際して会議に参画し、今まで以上に記念館収蔵庫に出入り

する機会が増えたことは先に述べたとおりである。その日は、突然やってきた。平成二三年の十一月八日の午後四時、記念館収蔵庫で未整理の場所を調査中に未発見の作品が筆者の手により発見された。

発見された場所は、収蔵庫の奥から二番目の棚の上から二段目である。諸橋が生前使用していた、引き出し三段からなる総桐の「郵便用具入」の上から三段目の引き出しの中からである。この郵便用具入の寸法は、外寸縦三十センチ、横二四センチ、高さ三一・五センチ。引き出しの外寸法は、縦二八・七センチ、横二一・三センチ、高さ八・三センチ。引き出しの内寸法は、縦二六・三センチ、横一八・九センチ、高さ七・八センチである。

一筆箋のような比較的小さめの詩箋や便箋に古文書、そしてメモ用紙など数十枚重なって入っていた中に、今回の絶筆二枚が混ざって入っていたのである。この、混ざって入っていたことで諸橋と同居していた長男の隆典^{たかすけ}氏家族も分からなかったと考えられる。また、記念館が開館する時に資料保存の陣頭指揮を執られた鎌田正博士も、東京から新潟まで移送するという制約された作業時間の中では、一々微に入り細に入り確認することは出来なかったであろうから、気付かなかったのはむしろ当然であろう。

現在、諸橋の子女は二人が饒燦として生活されている。一人は、本年九十歳になる三男の諸橋晋六氏（三菱商事株式会社特別顧問）である。もう一人は、本年八十四歳になる次女の阿佐美齊^{きよこ}子氏である。諸橋晋六氏が、昨年十一月に行なわれた第三回諸橋轍次博士記念漢詩大会に名誉会長として出席された時と、本年四月のリニューアルオープンに出席された時の二回、新発見の資料について話をお聞きました。要約すると「隆典（長男）も誰も分からなかった。勿論私も分かりませんでしたね。よく、こんなのが出てきましたな。」と話された。

三、新発見の絶筆について

今回発見の絶筆は、二枚ある。一枚は、五言絶句が墨書されているもの。もう一枚は、和歌と思われるものである。二枚の寸法は同じである。本紙寸法は、縦二三・三センチ、横十・二センチである。使用された用紙は断定できないが、詩箋と思われる。鶯色の地に、朱で「茶器（薬缶様のもの）に爐と枝葉（或は松か）」が画かれており、杜甫の五言律詩「重過何氏五首其三」の二句目「春風啜茗時」が刷られて賛として入っている。この用紙は、春風啜茗時に続いて「話口開室製」（話口の二字不詳）とあるが、残念ながらこの製品か不詳である。

①さて新発見資料の漢詩五言絶句は左のとおりである。

送驛還迎驛

驛を送り還た驛を迎え

那須問客程

那ぞ須いん客程を問うを

浮雲来去外

浮雲 来去の外

心月照佳城

心月 佳城を照らす

百歳老止軒

【韻字】 下平十四清（程城）

【製作年】 昭和五七年（一九八二）百歳の春頃か。また、即興の自作詩と思われる。

【注】 楷書に近い行楷書。小筆を用いて、一行十字で二行に書かれている。落款に印は無い。墨色からみて、中墨のやや薄めの濃さである。諸橋は、諸橋晋六氏の証言と記念館に保存されてい

る文房四寶から、使用された文房は中国製と推測されるが、今のところ断定はし難い。

【通釈】 題は書かれていない。「驛」を宿駅の比喩としている。

一年を送り、また新年を迎えることができた。どうして、残りの人生（の時間）を知る必要があるだろうか。（悠然と）流れゆく浮き雲の向こうでは、清らかな心のように澄み切った月が私の墓を照らしていることだろう。

②新発見資料の和歌は左のとおりである。

梅^{うめ}も見^み多^た婦^ふしもさく^{さく}らも若^{わか}艸^{くさ}も見^み多^た

こ能^の世^よの春^{はる}にもう
残^{のこ}る^お於^おもひなしら

止
軒

【製作年】昭和五七年（一九八二）百歳の春頃か。

【注】 書かれた墨の墨色からして、前の五言絶句と同時期に書かれたものと推測される。

【通釈】 偶々口から発した言葉が、歌になった気がする。特に、最後の「ら」字は、新潟県三条市ではよく使われる言い回しである。この場合は、「もう○○だな」という気分の表現に常用されるものである。

梅の花も見たし、藤の花も桜の花も若草も見た。
この世の春に、思い残したものは無いな。

記念館に、諸橋の日記が保存されている。現在、確認されている日記は、昭和五五年（一九八〇）の日記が最後である。晩年は、病のためか日記を書く回数も減っている。そんな中、昭和五四年（一九七九）十月七日の日記後半部に次のように書かれている。

数年来、三聖會談・三教叢談を執筆、その中に佛教口の儒教の佛教に及ばざる点は、行の欠如口に在りと論じて居た。その後予の常に似ず幾たび稿を改めたか知れない。最後にはもう仕方がない。不満足と承知の上、このまま出版するからといって出版者に渡した。七八月の夏休ミ中に印行すると云ったが、十月になった今もその氣わいがない。これ幸、不満足 of 著書は中止しようか。他面凡夫にはまだ若干の未練もあるが。

この記述から、諸橋は昭和五七年四月に講談社より刊行された『孔子・老子・釈迦「三聖會談」』、この最後の出版事業を終え安心したのではないか。この、安心したところで書かれたのが今回発見の絶筆ではなからうか。

四、最後に

これまでの検証結果をまとめてみよう。

茗溪會百周年記念のために書かれた扇面は、落款に「辛酉佳月白寿老人止軒」と書かれてあることから昭和五十六年（一九八一）九九歳の八月頃の書作であることは間違いない。

いっぽう、昨年十一月に発見された漢詩五言絶句の落款には「百歳老止軒」と書かれてあること、およびその内容から昭和五七（一九八二）年、百歳の春頃の書作であろうと推定できる。そうだとすれば、新発見の詩箋二枚をもって諸橋轍次の最晩年の書作であり、絶筆とすることにさほどの無理がないと思われるが、いかがであろうか。

最後に、詩箋二枚のうち、どちらが後に書かれたかという点であるが、大胆な推測をすれば、筆意筆力および「ら」の使用などからみて、五言絶句がまず書かれ、ついで興が乗るままに歌の方が書かれたと見られないだろうか。歌のほうの諸橋は、あたかも童心にかえったかのように自由である。筆者はそうした心境を最晩年の諸橋に想定したいと思うが、あくまで推定の範囲にとどまる。

いずれにしても、扇面と詩箋二枚が諸橋轍次の最晩年の手になることには変わりがない。前者は対外的にいわば公的に書かれた。後者は私的におのれの心境を托して書かれた。これらを残して諸橋轍次が昭和五十七年十二月八日に永眠するまで、なお半年を残していた。